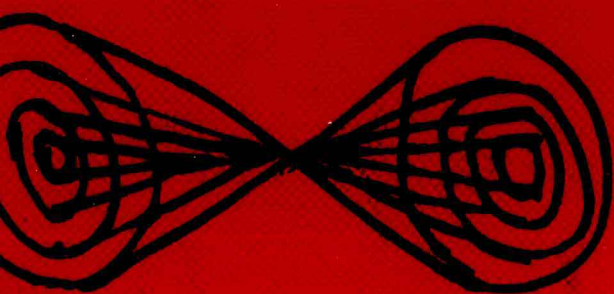


# フロベール

世界文學大

34



フロベール

ボヴァリー夫人  
感情教育

---

世界文學大系

34

筑摩書房版

世界文学大系 34

---

フロペール

---

昭和36年8月25日発行

定価500円

|     |           |
|-----|-----------|
| 訳者  | 伊吹武彦      |
| 発行者 | 古田晁       |
| 印刷者 | 山元正宜      |
| 発行所 | 株式会社 筑摩書房 |

東京都千代田区神田小川町2の8  
振替東京 165768 電話 (291) 局 7651

---

目次

ボヴァリー夫人

伊吹武彦訳 5

感情教育

生島遼一訳 179

フロベールの実験室

アルベール・ティボーデ  
生島遼一訳 415

解説

中村光夫 430

年譜

435

装  
幀  
庫  
田  
發

フ  
ロ  
ベ  
ー  
ル



## ボヴァリー夫人

## 第一部

パリ弁護士会会員  
前国民会議議長  
前内務大臣

マリ・アントワヌ・ジュール・セナールに

この書の冒頭、しかも献辞の上にあなただの名を記させて下さい。私がこの書を出版することができたのは特にあなたの賜だからです。堂々たるあなたへの弁護によって、私の作は私自身にとっていわば意外の權威を獲得しました。どうかここに私の感謝の意をお受けください。ただ残念なのは、私の感謝がどんなに大きくても、あなたの雄弁と献身の高さには及ばないことです。

一八五七年四月十二日 パリにて  
ギユスターヴ・フロベール

ルイ・ブイエに捧げる

## 一

私たちが自習室で勉強していると、そこへ校長が、平服を着た「新入」と、大きな机をかついだ小使を連れてはいって来た。いねむりしていた連中は眼をさました。そして誰も彼もが勉強中に不意を打たれた体で起立した。

校長は私たちに着席の合図をした。それから助教のほうに向き直って、

「ロジェ君」と小声になり、「この生徒は、二学年へ編入じゃ、よろしくたのむ。もし学力操行ともによければ、年相応の『上級』へ上げることにしよう」

扉のかげの隅にいたのでよくは見えぬが、この「新入」は十五くらいの田舎者で、身丈は私たちの誰よりも高かった。村の聖歌手のように髪をおかっぱにし、かしこまり、すっかりてれていた。肩幅は広くないが、黒ボタンのついた緑の羅紗（しや）のチョッキは、袖つけがいかにも窮屈そうで、いつもむき出しているらしい赤い手首が、袖飾りの切込みの間からのぞいていた。ズボン吊りできつく吊り上げた淡黄色のズボンから、青靴下をはいた脚がのぞいている。みがきの悪い、びょう打ちの頑丈な靴をはいていた。読み方がはじまった。彼はお説教でもきくよ

うに足も組まず、ひじもつかず、耳をすまして謹聴した。二時に鐘が鳴ったとき、助教は、皆といっしょに整列せよと注意せねばならなかった。

私たちは教室へはいるとき、早く空手になるように、帽子を床へはうり投げるしきたりになっていた。帽子がパツと土ぼこりを立てて壁に当たるように、しきいところから腰掛けの下をねらって投げねばならぬ。それが「しやれてる」のだった。

しかるに「新入」は、このしぐさに気づかないのか、それとも見ならう度胸がないのか、祈禱がすんでもまだ帽子を両膝にのせていた。その帽子は、コサック帽や槍騎兵帽や丸帽子、川類帽やナイト・キャップをつきまぜた襦（じゆ）式のかぶりものだった。つまり、その黙々とした醜さにかえって白痴の顔のような深刻な表情のある世にもあわれなしものだった。それは楕円形で、鯨骨（くじらごう）を張り、まず一番下には輪形の丸縁が三つ重なっている。つぎにビロードの菱模様とうさぎの毛の菱模様とが、赤線に仕切られてたがいちがいになり、その上には袋のようなものがあり、その上に多角形の厚紙をおき、これにはこみいった飾り紐で一面に縫い取りをほどこし、そこから金糸の小さい飾りを房にして、むやみと細長い紐の先にぶら下げた。帽子は新しく、ひざしは光っていた。

「起立」と先生がいった。

彼は起立した。帽子が落ちる。組じゅうが笑い出した。



かがんで拾おうとすると、隣の生徒がひじて帽子を突き落した。彼はもう一度拾いあげた。「まあかぶとを脱ぎたまえ」と、とんち屋の先生がいった。

生徒たちがどつときたので、かわいそうに少年はまごついて、帽子を手を持っていたものか床に置いたものか、それともかぶったものかわからなくなった。彼はまた腰を下ろして帽子を膝に置いた。

「起立して名をいいたまえ」と先生は言葉をつぐ。

「新入」はせき込んで、わけのわからぬ名を名乗った。

「もう一度！」  
組じゅうの罵声に打ち消されて、同じ早口の言葉が聞こえた。

「もつと大きく！」と教師は叫んだ。「もつと大きく！」

そこで大決心をふるい起こした「新入」は開口一番、誰か人でも呼ぶように、声を限りに「シャルボヴァリ」と絶叫した。

どつとはげしい騒ぎが起こって、金切り声とともにしだいしいに高まった（皆はわめき、うなり、足踏み鳴らして、「シャルボヴァリ！シャルボヴァリ！」とくり返した）。騒ぎはやつと止まつて、切れぎれにつづくかと思うところのび笑いが残つて花火のようにまだここかしこ起こっている腰掛けの列で、ときどき急にまたどつともり返した。

しかし雨と降る宿題の命令に組はだんだんと

しづまった。先生はようやくシャルル・ボヴァリーという名前を開き取り、それを発音させ、つづらせ、読み返させてから、ただちにこの哀れむべき少年を、教壇の下の方等席につかせた。少年は動く気配を見せたが、出かける前にもじもじした。

「何を探しとる？」先生が聞いた。

「私の帽……」と、あたりを不安げに見廻しながら「新入」はおそろおそろいった。

「全級、詩五百行の宿題だ！」先生のどなるその言葉が、大波を叱りつける海神の叫びのように、またしても起こる喧騒のあらしをしずめた。

「静かにせんか！」と、先生はおこつてなおもつづけた。そして帽子の中から取ってきたハンカチで顔をふきながら、「新入生、君は *ridiculous* (余は笑ひ者なり) という動詞を二十べん書いてきたまえ」

それから声をやわらげて、  
「なに、見つかるよ、帽子は。盗まれたんじゃないまいし」

すべてが静肅にかえった。生徒たちの頭は紙挟みのうえにかがみ、「新入」は二時間のあいだお手本になるほど行儀よくしていた。もつとも、ときどきベン先に突き刺して投げる紙の玉が、顔にあたつてインキのとばしりをつけたけれども、手で顔をふいて、眼を伏せたまま動かなかった。

晩の自習時間には、机から袖あてを出してつけ、こまごました持ち物を整頓し、紙へていねいに罫を引いた。見ると、単語をいちいち辞書

で引き、四苦八苦しながら、しごくまじめに勉強している。こうまでの熱心さを示したおかげであろう、彼は落第をせずにすんだ。というのは、彼は文法の規則こそひととおり心得てはいたが、言い回しのほうはいまぐなかつたからである。両親が儉約からできるだけ遅くまで学校へやらなかつたので、ラテン語の手ほどきは村の司祭がしてくれたのだった。

父親はシャルル・ドニ・バルトロメ・ボヴァリーという軍医補あがりで、一八二二年ごろ徴兵事件に連坐して、その当時退職となつた。そこで、彼は生来の美貌を利用し、どうどうたる風采にはれてきたさるメリヤス屋の娘に六万フランの持参金がついてゐるのをまんまとせしめた。美男子ではら吹きて、拍車の音を高らかに響かせ、頬ひげは口ひげに境を接し、指にはいつもたくさんの指輪をはめ、はでな色ものを身につけて、まるで豪傑のような風貌と、行商人のような安っぽい快活さをそなえていた。いざ結婚すると、二、三年は妻の財産で生活し、たらふく食つて朝寝坊して、大きな瀬戸物のパイプをふかし、晩は興行物がはねてからでなければ帰つてこず、カフェーへもしげしげかようありさまであった。そのうち妻の父親が死んだが、たいした金も残してはくれなかつた。彼は憤然として身を「製造業」に投じたが損をし、それから田舎へ引つ込んで「農場経営」をこころざした。しかし彼が農業に暗いのは、インド更紗製造に暗かつたのと同じで、馬は畑へやらすに自分のがりまわし、りんご酒は樽売りせずに

で飲み、飼養場飛切りの鶏を食いつぶし、豚のあぶらで靴をみがくというやり方なので、間もなく、いっさいの思惑は打ち切るにしかずとみずからさるような羽目になった。

そこで、年二百フランの約束で、コー地方とピカルディー地方との境の村に、農家と屋敷と半々のような家を借り受けた。彼は快々として樂しまず、後悔にさいなまれ、天をうらみ人をそねみ、彼の言葉によれば人間ともに愛想をつかし、余生をしずかに送る覚悟で、四十五歳の若さでそこに引きこもった。

彼の妻は昔は彼に夢中であつた。下手に下手に出て夫を愛したのが、かえっていいよ夫を自分から遠ざけることになった。昔は陽気で快活で情の深い女であつたが、年をとるにつれて——ちょうど気の抜けたぶどう酒が酔になるように——氣むずかしくなり、金切り声をあげ、神経過敏になった。自分の夫が村の娘たちときえいえばその尻を追いかけるのを見たときや、晩になって、夫があちこちの悪所から堪能した熟柿くさい息をはきながら帰ってきたとき、彼女はずいぶん苦しんだ。しかし最初は苦情一ついわなかった。やがて自尊心が反抗の頭をまたげた。そこで彼女は、無言の隠忍主義のなかへ憤怒をぐつとみ込んで、口をつぐみ、その隠忍主義を死ぬまで守った。彼女はたえず用事で駆けずり廻った。代言人や裁判長を訪ねたり、手形の支払日を思い出しては、しばしの猶予を乞うたりした。家にいればアイロンかけや縫物や洗い物をし、人夫を監督したり、勘定を払っ

たりした。しかるに主人公は何の屈託もなく、いつも仏頂面していねむりに前後不覚、眼をさませば妻に厭がらせをいうばかりで、灰の中につばをはきながら燐炉のわきでたばこをくゆらしていた。

彼女が子供を生むと、その子を里子にやることになった。両親の手もとへ帰ってくる、子供は若様のように甘やかされた。母親はしきりにジャムを食べさせる。父親は素足で走り廻らせる。そしてひとかど思想家ぶって、この子は獣の子のように、素裸で歩かせてもよいのだなどといった。母親の傾向とは反対に、彼の頭には少年期にたいする一種の男性的理想があつて、それによつて息子をしつけようとし、体格をよくするためにスパルタ式にきびしく育てたが、火の氣のない部屋に寝かせたり、ラム酒のがぶ飲みを仕込んだり、教会の行列を罵倒することや教えた。しかし生まれつきおとなしいこの子は、うまく彼の努力についてこなかった。母親はいつもこの子をそばに連れていた。厚紙を切つてやつたり、お話をしてやつたり、彼を相手に、寂しいふさげや、くだい甘やかしにみちみちた果しないひとりでせりふを聞かせるのであつた。捨て小舟のように寂しい彼女は、さんさんに打ちこわされた自分の虚栄をすべてこの少年の上に託した。彼女は立身出世を夢みて、この子が早や大きく美しくひとかどの才子になつて、土局か法曹界におさまっている姿を想像した。子供に読み方を教え、手持ちの古ピアニで唄の二つ三つも歌うことを教えた。しかし

文芸に氣のないボヴァリー氏は、それにたいしていちいち「無駄なことだ」といった。いったい、この子を官立学校に入れておいたり、公吏の株や商売の株を買つてやるだけのものが家にあるのか。それに、「男は押しさえあれば、世のなかでかならず成功するのだ」などといった。ボヴァリー夫人は唇をかみ、子供は村をはつき歩いた。

彼は百姓のあとにつき廻つた。そして土くれを投げては飛び去るからすを追いかけた。掘割に沿つて桑の実を食べ歩いたり、長い竿を持つて七面鳥の番をしたり、収穫の時には刈草をはしたり、森の中を駆けまわつたり、雨の日には教会堂の玄関先で石けりをしたり、大祭日には、鐘の大綱にぶらさがつて、綱といっしょに揺れ動くあの氣持を味わうために、堂守に頼んで鐘をつかせてもらつたりした。

そこで彼はかしの木のように成長した。手は頑丈になり、血色もよくなった。

十二のとき、母親はこの子に勉強をはじめるゆるしをえた。それは司祭に一任された。しかし授業は短く切れきれないので、物の役にはたちそうもなかった。授業があるのは手すきのときである。洗礼式と葬式のあいまなど、聖器室の中で立つたままあわただしくやつた。でなければ、御告の祈りがすんで外出の用のないとき、司祭は弟子を呼びにやつた。司祭の部屋へ上つて席につく。羽虫や蛾がろうそくのまわりを飛び廻る。暑いので少年はよくいねむりする。すると老僧は両手を腹にのせてまどろむか

と思うと、やがて口をひらいていびきをかきはじめた。またあるときは、司祭が近所の病人に臨終の聖餐をもたらし、の帰り道、シャルルが野原でいたずらしているのを見かけると、呼びつけてものの十五分も説教し、それをしおに木蔭で動詞の変化を練習させることもあった。ところが雨が降ってきたり、知合いの人が通りかかったりして、それもおじちゃんになった。もつとも司祭はいつもこの子にはご満悦で、この「若い」はたいそう物憶えがよいとさえないのだった。

シャルルの勉強はこんなところでやめてはならぬと、夫人は強硬に出た。一本まいて、というよりも根負けして、主人公はいいなりになった。そしてこの子が初聖体をすますまで、もう一年待った。

また六カ月たった。そしてその翌年、シャルルはいよいよルアンの学校へやられることになり、十月も末、聖ロマンの市のところに、父親が自分で連れ去った。

しかしいまでは、われわれ級友のうち彼についてこれという思い出のある者はひとりもありません。彼はおとなしい子であった。遊ぶときには遊び、勉強する時間には勉強し、教室では謹聴し、寝室では熟睡し、食堂ではたらふく食べた。保証人はガントリィ街に住む金物の鉦屋で、一月に一回日曜日に、店を休めてから彼を外出させ、港へ船を見にやり、七時、夕飯まえになると学校へ連れ戻った。木曜日の晩、少年は母親に長い手紙を書いた。赤インキで書いて封印

を三つ押した。それから歴史のノートを復習したり、自習室にはうり出してある古本の『アナカルシス』を読んだりした。遠足のときには小使と話をした。この小使も彼と同じ田舎者だった。

勉強のおかげで彼はいつも組の中ほどにいた。博物の試験で一度良の一番を取ったことさえある。ところが四年生の終りになると、両親は彼が独力で大学の入学資格を取るところまで押せるだろうと思ひ込み、医学修業のために中学を退校させた。

母親は知合いの染物屋の、オー・ド・ロベツク川に面した五階に子供の部屋をえらんでやった。下宿代を取りきめ、家具すなわち机一台と椅子二脚を買い求め、自宅から桜材の古ベッドを取り寄せ、おまけにいとし子を暖めるための、小さい鉄ストーブと薪を買った。そしてその週の終りに、これからはひとりだから、まじめにするようにと、くれぐれも言いふくめて帰っていった。

講義一覧を揭示で読んだとき、彼はほうぜんとした。解剖学講義、病理学講義、生理学講義、調剤学講義、化学、植物学、臨床、治療学の講義、それに衛生学や薬物学はいうまでもなかった。どれもこれも、語原のわからない字ばかりで、そのひとつひとつが彼には荘嚴の闌たちこめる聖廟の扉のように思われた。

講義はぜんぜんわからなかった。懸命にきいても意味がつかめない。しかし彼は勉強した。つづり込みのノートを持ち、どの講義にも出席

し、ただの一度も回診をかかしたことはなかった。ちょうど仕込まれている馬が、自分でなにを苦しんでやっているのかわからずに、目くろのまきキリキリ廻るように、彼はその日その日のささやかな仕事を果たしていった。

費用をはぶいてやるために、母親は毎週飛脚に託して天火焼の猪肉をひと切れずつ送ってよこした。病院から帰っているときは、彼は靴底で壁をけつて足を暖めながら、その肉で朝飯を食べた。それからほうぼうの道を通って、講義へ、階段教室へ、養育院へ駆けつけ、家へ帰らねばならなかった。晩は下宿のお粗末な夕食をすましてからまた自分の部屋へ上がり、しめつた服を身につけたまままでふたたび勉強に取りかかった。服はまっ赤に熱したストーブの前で全身から湯気を立てた。

美しい夏の宵、なまあたにかい町々には人通りもたえ、女中たちが家の戸口で羽根つきをして遊ぶころ、彼はよく窓を開いてひじをついた。川が、ルアン市のこの界限を醜惡な小ヴェニスのように見せて、眼下に低く、黄に紫にまたは青に、橋や鉄柵の間を流れていた。労働者たちが川のほとりにうすくまわって、両腕を水で洗っていた。屋根裏部屋から突き出した竿に木綿糸の枠が干してあった。むこうの屋根のかなたには澄み切った大空が広がった。ああたりへ行くらく赤い夕陽のかげがあった。あのあたりへ行ったらどんなにいい気持ちだろう！ ぶなの木蔭はどんなに涼しいことだろう！ 彼は鼻腔をひらいてこころよい野の香りをかこうとした。しか

し彼のところまでは匂ってこなかった。

彼はやせて身丈がのびた。そして顔は悩ましげな表情を帯びてきた。そのためにまずひととおりは見られるほどの顔になった。

ずるずるべったりのにききな気持から、彼はとうとう、かねての覚悟をみんな捨てた。回診を一度なまけ、その翌日は講義を休んだ。そしてなまけ心地のよさを味わいながら、だんだん学校へは出なくなった。

彼は居酒屋通いのくせがつくとともにドミノに熱中した。毎晩、薄汚いクラブにこもって、黒い点々のついた小さい羊の骨のドミノ札を、大理石のテーブルにたたきつけるのは、われながらえらくなったような、なんとなく尊い、自由の行為とも思われた。それはいわば、はじめて世間を知ることであった。禁断の快楽に近づくことであった。彼はこの部屋へはいりがけに、肉感に近いよろこびを感じながら扉の握りに手をかけた。こうなると、いままでも内におさえていたなにもかにもがふくれ出した。唄をおぼえて、寄ってくる女たちに歌って聞かせたり、俗謡作者ペランジュに熱中したり、ポンスの作り方を覚えたりした。そしてとうとう色恋を知った。

こういう下稽古をやったおかげで、彼はみごと、免許医試験に落第した。ちょうどその晩、家では彼の及第を祝おうとその帰りを待っていたのに！

彼は徒歩で出かけた。そして村のはずれに立ち止まり、そこへ母親を呼び寄せていっさいを

打ち明けた。母親は落第を試験官の不公平のせいにして許してやった。そして後始末を引き受けて彼をいささか安心させた。それから五年たつて、ボヴァリー氏ははじめて事の真相を知った。なにぶんにも古いことなので彼も得心したその上、自分の血をうけた人間が馬鹿であるとは思えなかった。

シャルルはまた勉強をはじめ、試験に出る範囲をひっきりなしに準備し、試験問題はまえもって全部暗誦した。彼は相当な成績で及第した。母親にとつてはなんという嬉しい日！ 盛大な晩餐会がひらかれた。

どこで開業せようか。トストがよい。そこには年寄の医者がひとりいるきりだ。ボヴァリー夫人はひましくその人の死ぬのを待っていたが、じいさんのまだ冥途へ旅立ちしない先に、シャルルは後釜としてその向いに陣取ったのである。

しかし、息子を育てて、医学を仕込み、開業させるためにトストを見つけただけではまだ足りない。息子には嫁が必要だ。母親はひとりの嫁を見つけ出した。ディエップに住んでいる執達吏の未亡人で、年齢は四十五、年収は千二百フランあった。

不器量で、薪のようにひからびて、木の芽立ちのようににきびだらけの女ではあったが、このデュビュク夫人にもむろんえり好みするだけの相手はあった。ボヴァリー夫人は自分のおもわくを遂げるために、競争相手をことごとく押し

れた豚肉屋の策動さえ、彼女はあざやかに裏をかった。

シャルルは結婚によって、いまよりもっとよい状態のくることを予想していた。もっと自由になり、からだや金が好き勝手になるものとはかり思っていた。ところが女房の天下になった。人前ではこういわねばならぬ、ああいつてはいけない。金曜日に肉を食べてはならぬ。女房のいうとおりの身なりをしなければならぬ。女房の払いの悪い患者を女房の言いつけでせき立てねばならない。女房は彼にきた手紙を開封し、彼の行動を監視し、婦人患者のあるときは、診察室でみているのを壁越しに盗み聴きしたりした。彼女は毎朝チョコレートを飲まねばおさまらず、きりのないほど世話がやけた。神経がどうの、胸がどうの、気分がどうのと泣きごとをいいておす。足音がしても気分になさる。人が行ってしまうとさびしくてたまらないくせに、そばへ戻ってくると、「おおかた私が死ぬと思つて見にきたんでしよう」といった。晩にシャルルが帰ってくるとシーツの下からせ細った腕を出してシャルルの首に巻きつけ、ベッドのへりに引きすえて、あなたは私というものを忘れて、よその女をおもっているのだとか、私はかならず不幸になると人にいわれたことがあるとか口説き立てたすえは、かならず滋養のための舎利別といま少しの愛とを求めるのであった。

## 二

ある晩の十一時ごろ、ふたりは馬蹄の音に眼

をさました。それはちょうど門前に止まった。女中は屋根裏のあかり窓をあけて、下の往来にいるひとりの男としばらく押し問答をした。この男は先生を呼びにきたのだった。そして手紙をもっていた。ナスタジューは寒さにふるえながら階段を降りて、錠前を開き、ひとつひとつかみぬきをはずした。男は馬をあとに残し、女中についてうしろからぬつとはいって来た。彼はねずみ色のふさのついた毛織り頭巾のなかから布に包んだ手紙を取り出して、そつとシャルルに手渡した。シャルルは枕にひじをついて読んだ。ナスタジューはベッドのそばで明りを持っている。夫人は、はにかんで、壁のほうに向き、背を見せていた。

青色の小さい封印をおしたその手紙は、足の骨をついでいたため、ボヴァリー先生に至急ベルトーの農場へお越し願いたいという依頼であった。ところが、トストからベルトーまでは、ロングヴィール、サン・ヴィクトールを通じて間道六里はたつぷりある。夜は暗かった。ボヴァリー若夫人はまちがいがあつてはと心配した。そこで馬丁がさきに帰ることにきまつた。シャルルは三時間して、月の出を待つて発つことにした。シャルルを農場へ案内し、先に立つて柵門をあけるために、先方は小僧をひとり迎えに出すことになった。

朝の四時ごろ、シャルルは外套にすっかりくるまうて、ベルトーをさして出発した。暖かい眠りのまださめやらぬシャルルは、静かな馬のあゆみに揺られるままに身をまかせた。よく畦

のほとりに掘つてある茨でかこまれた穴の前に来て、馬がひとりでに足をとめると、シャルルはとたんに眼をさまし、折れた足のことを思い出し、知っている限りの骨折の種類を記憶に呼びもどそうとした。雨はもうやんでいた。夜が明けそめて、葉の落ちたりんごの枝には、小鳥が可愛い羽根を冷たい朝風にけば立てながら止まっていた。平原は眼路もはるかに広がっている。地平のかなた、空に溶け込む広い灰色の野づらには、農場を取りまく木立の群が、遠い間をおいては、暗紫のまだらをつくっている。シャルルはときおり眼をひらいた。しかし心が疲れて、またおのずと睡気をもよおすので、やがて夢うつつの境にはいつていった。そこでは、ついでにまさき感覚が昔の思い出にからまつて、自分が二重に感じられた。自分は学生でもあり結婚もしている。さっきのようにベッドに横たわつてもいれば、また昔のように外科病室のなかを通つてもいける。彼の頭のなかでは、湿布薬のあたたかい匂いが緑の露の香に入りまじった。病室のベッド・カーテンの鉄の輪が桿の上に廻る音と妻の寝息が聞こえてくる……ヴァンソンヴィールにさしかかると、とある溝端の草の上に子供が坐っているのが眼についた。

「先生ですかい？」とその子がきいた。  
シャルルの返事をきくと、子供は、木靴を脱いで手に持つて、先に立つて走り出した。

免許医先生は、道々、案内人の話を聞いているうちに、ルオーという人はよほど裕福な百姓にちがいないことがわかった。ルオーはその前

夜、近所の家で「公現祭」の集まりをしての帰るさ、足の骨を折つたのであった。二年前女房に先立たれ、家には「お嬢さん」がいるきり、このお嬢さんが父を助けて家事万端の切りもりをしている。

轍が深くなった。ベルトーへ近づいたのである。と子供は生垣の穴をすり抜けて姿を消した。そして、今度は庭の端に現われてその柵門をあけた。馬はしめつた草の上に足をすべらせた。シャルルは身をかがめて枝の下をくぐつた。犬小屋の番犬どもが鎖をひっぱりながら吠えつた。ベルトーの農場へはいると馬はおびえて大きくそれた。

それは立派な構えの農場であつた。厩の中には、大きな耕作馬が新しい秣棚でゆうゆうと餌を食べているのが、開いた扉の上のほうから見える。棟々に沿つて大きな堆肥がつらなり、そこから湯気がのぼつていた。その上には、雌鶏や七面鳥にまじつて、コー地方の養禽場にしてはぜいたくな孔雀が五、六羽、餌をあさっていた。羊小屋は長くのび穀物倉は高くそびえて、その壁は人の手のようになめらかであつた。物置には大きい荷車が二台と鋤が四つ、それに鞭や馬の首環やそのほか付属品一式があり、そのうち青色に染めた羊の毛皮は、二階の納屋から落ちるこまかい埃によこれていて。庭は爪先あがりになつていて、木が左右同様に間隔を置いて植ゑてあり、驚鳥どものにぎやかな騒ぎが池のほとりに響いていた。

裾裳の三つある青いメリノ服を着た若い女が

玄関口に出迎えて、ボヴァリーを料理場へ招き入れた。暖炉の火が燃えさかっている。部屋のもわりには、雇人たちの朝飯の料理が、とりどりの小さなべに煮立っていた。しめった衣類がつかりつけ、暖炉の内側に干してある。十能や火挟みや鑊の口はどれもみんなばかに大きくて、みがおいた鋼のように光っていた。一方、壁に沿っておびただしい台所道具が並び、その表面には、ガラス越しに射しこむ暁の色にまじって、暖炉の明るい炎がとりどりに照り映えていた。

シャルルは患者をみに二階へ上った。見ると病人はベッドに横たわって、ふとんをすつかぶって汗をかき、ナイト・キャップをずつと遠くへ投げ飛ばしていた。五十がらみのでつぷりした小男で、顔は白く眼は青く、額ははげあがり耳輪をはめていた。かたわらの椅子にブランドーの大瓶を置いて、腹に力をつけようとときどき注いで飲んでいた。しかし、医者の姿を見ると興奮が一時にさめて、十二時間もとなりつづけたのとはうって変わって、かほそい声でうめき出した。

骨折というのは合併症のまったくない単純性のものだった。シャルルもこれほど手軽とは思っていなかった。そこで彼は、自分の先生たちが負傷者のベッドのかたわらでしやり口を思い出し、いろいろ冗談口をきいて患者に精をつけた。それはメスにぬる油と同じ外科的愛撫だった。患者に当てる添木を造るのに、車置場へ割板の束を取りにやった。シャルルはそのうち一枚をよってこまかに切り、ガラスの破片でそ

れをみがくと、女中は細帯を造るために布切れを裂き、エンマ嬢は当て物を縫おうとした。しかし針箱が容易に見つからないので父親はじれて叱りつけた。彼女は口答え一つしなかったが、縫っているうちに何度か指を突いた。するとそれを口へ持つていつては吸った。

シャルルは彼女の爪の白さに驚いた。きらきら光って先が細く、ディエップの象牙細工よりもきれいにみががかって、先とがりに切つてあった。しかし手は美しくなかった。白さがたりないようだし、関節がすこし骨張っていた。それに長過ぎて、輪郭に柔らかみがなかった。彼女の美しいところは眼であった。茶色のくせに、まっつけのせいで黒く見えた。あどけなく大胆に、ぐつと見えるような眼つきであった。

手当てがすむと、医者は当のルオー氏から、お帰りになるまえ「ちょっとひと口召し上られ」とすすめられた。

シャルルは下の食堂へおりた。そこには二人前の食器が銀の杯をそえて小机の上に置いてあった。机は、トルコ人模様のインド更紗をかけた天蓋つき大型ベッドの裾のほうにあった。窓と向かい合った背の高いかしの箆笥から、いち

はつ入りの香水やしめったシャツの匂いがした。床の上、部屋のすみずみには小麦の袋が立て並べてある。それは石段を三つ上れば行ける穀物倉にはいり切らない分であった。白まだらができて緑のペンキがうるこになった壁のまんなかには、部屋の飾りに、黒鉛筆で描いたミネルヴァの顔が、金縁の枠にはめて釘にかけてあり、

絵の下には、「愛する父上に」とゴチック字体で書いてあった。

まず病人の話が出、つぎにその日の天気のことや、きびしい寒さのことや、夜、野原を駈けまわる狼の話が出た。ルオー嬢は、たいいひとてりで農場の世話をさせられているので、田舎がいまはことさら面白くないといった。部屋が寒いので彼女は食べながらブルブルふるえた。すると、黙っているときはいつもかんでいる厚い唇が少しばかりあらわれた。

白い折襟から首が出ていた。髪の毛はまんなかからわけてある。両方の黒い髪はなめらかでひとつづきのように見え、わけ口の細い線は頭のカーブどおりに軽くくぼんでいた。髪は耳たぶをわずかに見せながら、こめかみのほうへウェーブしつつ、うしろへいつて一つになり、たつぷりした髻につかねてある。こめかみのウェーブなどを見るのは、この田舎医者にはへその緒切つてはじめてだった。頬はばら色だった。まるで男のように、上着のボタンとボタンの間に瞼甲眼鏡をさし込んでいる。

シャルルはルオーじいさんに別れの挨拶をしに二階へ上ってから、帰るまでに、もう一度食堂へはいつてくると、彼女が顔を窓に押しあてて庭をじつと眺めているのが見えた。庭には隠元豆のそえ木が風に倒されていた。彼女は振り返って、

「なにか探していらっしやいますの」ときいた。「鞭なんですがね」と彼は答えた。

そしてベッドの上や扉のかげや椅子の下を探



しはじめた。鞭は袋と壁の間に落ちていた。エシマ嬢はそれを見つけて、小麦袋の上へ身をかがめた。シャルルは、いたわるようにはせ寄つて、同じく腕をのばしたはずみに、自分の胸が下にかがんでいる娘の背にそつと触れるのを感じた。彼女はまっ赤になつてからだを起こし、鞭をさし出しながら肩越しに彼を見た。

彼は約束通り三日してベルトへくるどころか、すぐそのあけの日にやつてきた。それから毎週きまつて二回ずつきた。空とぼけて、ときどき不意に訪ねてくるのは別であつた。

もつとも万事は順調に運んだ。なおり工合は理論どおりだった。四十六日目にルオーじいさんが「農場」の中でひとり歩きの稽古をしているのを見たときには、ボヴァリー先生は大した腕利きだとみんなの者が考えはじめた。イウトーの町、いやルアン市一流の医者にかかつて、こんなによくはならなかつたらうとルオーじいさんはいふのだった。

一方シャルルは、なぜ自分が喜んでベルトへかよつてくるのか、考えようとしなかつた。考えたにしても、おそらくはその熱心さを、重傷のせいにしたか、それとも当てこんでいる謝礼のせいにしたかもしれない。しかし農場への往診が、日頃のつまらぬ仕事のなかのひとつの楽しい例外となつていたのは、はたして上の理由からであつたらうか。往診する日には朝早く起き、駆け足で発ち、馬を急がせ、さてそれから馬をおりて草で靴をぬぐい、なかへはいる前に黒手袋をはめた。彼はこうして庭へはいって

ゆくのがうれしかった。柵門が廻るのを肩先に感じるのがうれしかった。塀の上で鳴く雄鶏も迎えにくる下男たちもうれしかった。穀物倉も既もうれしかった。自分を救ひの神だといつて、手をとらんばかりにするルオーじいさんもうれしかった。きれいに洗つた料理場の石畳をふむエシマ嬢の可愛い木靴もうれしかった。かかたが高いので彼女は心もち大きく見えた。彼女が先に立つて歩いてゆくと、木の靴底がスツとあがつて、その下にはいっている半靴の革にあたつてはポコポコ鳴つた。

彼女はいつでも玄関の上り口の一段目まで彼を見送つた。馬がまだ廻されていないときは、彼女はそこにじつとたたずんでいた。別れの挨拶は先にすんでいるので、もうなにも話しはしなかつた。ひどい風が彼女を包んで襟首のおくれ毛をかきみだしたり、前掛けの紐を腰のうえにゆすつたりした。紐は吹流しのようにくねつた。あるとき、ちょうど雪どけの候で、庭では樹の皮が雪をたらし、屋根の雪が溶け出していた。彼女は闊口に立つていた。彼女はバラソルを取つてきてそれを開いた。鳩羽色の絹日傘に陽の光がおつて、彼女の顔の白い肌にゆらゆらと映つた。彼女はその下で暖かい陽気にはおえみかけた。木理のある張り切つた傘の網へ、雨だれのポツリポツリと落ちるのが聞こえていた。

最初シャルルがベルトへかよつていた頃は、ボヴァリー若夫人は欠かさず患者のようすを尋ね、しかも自分でつけている複式帳簿には、ル

オー氏の分に白いところをページ取つておいた。ところがルオー氏に娘のあることを知ると、彼女は方々を調べ廻つた。そして、ルオー嬢がユルシュル派尼僧院で教育され、いわゆる「立派なお仕込み」を受けたということを、したがつてダンスや地理や絵の心得があり、綴れ織もできるし、ピアノも弾けるということを知つた。もうがまんがならぬ。

「ではそのためなのか」と彼女は考えた。「あの娘に会いにゆくとき、あんなにうれしそうな顔をするのも、雨にあたつて傷むのもかまわず新しいチョッキを着てゆくのも。ああ、あの女め、あの女め!……」

彼女は本能的にその娘を憎んだ。最初は遠廻しにあてつけて胸をはらした。シャルルにはそれが通じない。つぎには話のなかに述懐をはさんでみたが、シャルルは事が荒立つのをおそれて聞き流しにした。ついには真正面からはげしく攻め立てた。これにはシャルルは返答のしようがなかつた。——ルオーさんはなおつたんだし、それにあの家はまだ払いがすんでいないのに、またしてもベルトへ行くのはどうしたわけか。むろんそれは向うに「おえらい方」がいるからのことだ。話相手になれる人、刺繍のできる人、教育のある人がいるからだ。あなたのすきなのはそれなんだ。あなたは町の娘がほしんだ! さてそれから言葉をついで、

「ルオーじいさんの娘が町の娘ですつて! ちゃんちゃらおかしい! あそこのお祖父さんは羊飼いでした。それから、喧嘩のときに大それ

たことをしてかして裁判になりかかった身内があるんですよ。いくらあんなにばったって、いくら伯爵夫人みたいに絹もので日曜日に教会へのし出たって、駄目の皮です。それにあのじいさんもきのどくに、去年の菜種が売れなかつたら、借金の払いにも困るところだったんですよ」

シャルルはうんざりしてベルトー行きをやめた。妻のエロイズは愛情を爆発させて、さんざん泣いたりキッスしたりしたあけく、もう二度と行かないということを、ミサ書に手置いてシャルルに誓わせた。シャルルは従った。しかし彼の欲望の強さが、行動の意気地なさに反抗した。そして彼は、あの娘に会うなということとは、とりもなおさず、あの娘を愛する権利を与えられたようなものだとか駄々っ子のように白ばくれて考えた。それに後家あがりの女房はガリガリにやせている。歯がいやに長い。季節がまわらずに小さい黒ショールをかけて、その先を肩胛骨の間にたらしめている。コチコチのからだの輪がよろしくのドレスにおさまっている。ドレスは短かすぎるので、大きな靴につけた飾りリボンがねずみ色の靴下の上に交差しているのや、足首までがあらわに見えた。

シャルルの母親はときどきふたりに会いにきたが、二、三日もすると、嫁が自分の鋭い刃で、始を磨ぎすますのではないかと思われた。こうなると、彼女らはまるで二挺のナイフのように、意見や小言を振りかざしてシャルルをめった斬りにした。そんなに物を食べてはいけな

だの、誰かまわずになぜ酒をふるまうかだの、どうあつてもネルを着ないとはなんという強情な人だろう、などといった。

ところが春のはじめ、アングルーヴィルの公証人でデュービュク未亡人の財産を預かっている男が、事務所のあり金全部をかつさらい、上げ潮に乗って逐電した。なるほどエロイズには、見積り六千フランと称する船株のほかに、聖フランソワ街に家は一軒残っていた。ところが、以前鳴物入りで吹聴していたこの全財産のうち、わずかばかりの家具と衣類のほかに、なにひとつ家のなかへ姿を見せなかった。いよいよ事をはっきりさせねばならなくなった。すると、ディエップの家は屋台骨まで抵当の虫に食われていることがわかった。彼女が公証人の手にどれだけ預けておいたかは神様のほかに知る者はなく、例の船株も三千フランを超えてはいなかった。してみると婆さんうそをついたのだ！

カツとなって、ボヴァリー老人は椅子を石畳にたたきつけてめちやめちやにしながら、息子をあんなやせ馬に引かせて——身につけている馬具のほう毛が毛なみよりはなお悪いやせ馬に引かせて、息子をさんざんな目にあわせたのは、おまえの罪だと妻を責めた。両親はトストへ出ばつてきた。押し問答がはじまった。幾度も喧嘩がもち上がった。エロイズは泣く泣く夫の腕に身を投げかけ、両親に弁解してくれと夫をかき口説く。シャルルは妻のために一言しようとしたが、両親はおこつて帰ってしまった。一週

間して、彼女は洗濯物を庭で干しているとき急に咯血した。そしてそのあくる日、シャルルが窓掛けをしめようと向うをむいている間に、「ああ、いけない！」とひとこといい、溜息をついて気絶した。見るともう死んでいる！ なんと驚き！

墓地でいっさいの勤めが終わるとシャルルは家へ帰った。下には誰もいなかった。彼は二階の部屋へあがって、妻のドレスがまだ寝間の足もとにかかっているのを見た。彼は机にもたれて夜になるまでなやましい思いにふけつた。とにかく妻は彼を愛していたのだ。

## 三

ある朝、ルオーじいさんはシャルルのところへ足の治療代を持ってきた。四十スーの貨幣で七十と五フラン、それに七面鳥を一羽そえてあつた。ルオーはシャルルの不幸を聞いていたのでせいいっぱい慰めた。

「私にもおぼえがありませう！」と相手の肩をたたきながら、「私だって先生と同じことでしたよ。死んだ女房に逝かれたときにや、ひとりぼっちになりたくて、よく野良へ出かけたもんです。木の根にぶつ倒れて泣きましたよ。神様の名を呼んで、神様に悪態もつきましたよ。私は木の枝に引っかけられているもぐらになりました。とうとう腹がさけて、なかに虫がウヨウヨしているもぐらみたいです。世間のやつらがいまごろはかわいい女房をじっと抱き寄せていやがると思うと、私はそのへんの土を杖でぶつ



てぶつてぶちまかつたもんです。私にまるで気持ちがよいようになって、ものも食えなくなりましたよ。うそのようだが、居酒屋へ行くなんて思ってもいやでしたね。ところがです、静かに一日一日と日がたつて、冬が過ぎて春になり、夏がすんで秋がくるうちに、少しずつだんだんに薄れましたね。なくなりましたね。消えましたね。いや沈んだといったほうがいい、やつぱり底のほうになにか残っていますからな。なんだかこう……重石のようなものが、ここに、胸の上に！しかし、これが人の天命なんだからお弱りになっちゃいけません。人が死んだから自分も死のうなんて……しつかりしてくださいよ、ボヴァリー先生。いまに過ぎてしまいきますよ。ちっと家へおいでなさるがいい。娘がときどき先生のことを思い出してます。そして先生はもう私をお忘れだなんて、そんなことをいってます。もうやがて春でさあ。少しはお気晴しに、原っぱでうさぎ撃ちをおさせ申しますよ」

シャルルはその忠告に従った。ふたたびベルトへきてみると、すべてはもとのまま、つまり五カ月以前のままであった。梨の木にはもう花が咲き、ルオーじいさんはいまでは起きてうろろしていた。それで農場は一段と活気づいていた。

ボヴァリー先生の悲しい身の上を思えば、懃懃の限りをつくすこそおのれの務めであると心得たルオーは、帽子を脱ぐなとすすめたり、病人にでもいうように小声で話しかけたり、万

シャルルのために、小壺入りのクリームや梨の煮物など、特別軽いものが用意してないと、おこるようなそぶりさえみせた。彼はいろいろな話を聞いて聞かせた。シャルルはうっかり笑い出した。しかし急に妻のことを思い出して憂鬱になった。コーヒーが出る。彼はもう妻のことは思わなかった。

やもめ暮しになれるにつれて、妻のことはだんだん考えなくなった。わがままのできる新しい喜びがやがて孤独をいっそうたえやすいものにした。いまは食事の時間を勝手に変えることができる、出入りにいちいち言訳がいらない、ぐったりしたときにはベッドいっぱい大の字になれる。彼は自分をいたわり甘やかし、人の慰めを喜んで受けた。また一方、妻の死は相当商売のたしになった。というのは、一カ月の間は皆が「お若いのに気の毒な！」と口々にいってくれ、そのために名が売れて患者がふえたからである。そのうえ遠慮なくベルトへ出かけることができた。彼はあてのない望みをいだき、とりとめもない幸福を感じていた。彼は鏡の前で頼ひげにブラシをあてながら、男前が上がつたぞと思った。

ある日彼は三時頃に訪ねてきた。みんな野良へ出かけていた。彼は炊事場へはいっていったが、はじめエンマのいるのが眼につかなかった。窓底がしめてあったのである。板のすきまをとおして、陽の光が細長いすじをいくつも石畳の上に引いていた。その線は家具の角にくだけ、天井にふるえていた。蠅が食卓の上で、飲み捨

てたコップを伝つてのぼり、底に残ったりんご酒のなかにはまりこんでブンブンいっていた。煙突からさしこむ陽の光が、暖炉の蓋の煤をピロッドのように見せ、冷たい灰をほのあおく照らしていた。窓と暖炉の間でエンマが裁縫をしていた。頸巻をしていないのであらわな肩の上に細かい汗の雫が見えた。

田舎風にエンマは飲み物をすすめた。ことわったがぜひにといひ、しまいは、リキユールをつき合ってくださいと笑いながらい出した。そして戸棚へキユールソーの瓶を出しにゆき、小さいグラスを二つおろし、その一つにはなみなみと注ぎ、もう一つにはちよつと注ぐまねだけして、杯をふれ合せてから口もとへあてた。グラスはほとんど空なので、彼女はそり返って飲んだ。ああむいて、唇をとがらせ、首をのぼしながら、口の中になんか感じもないのをおかしがって笑うと、舌の先が美しい歯の間から出て、グラスの底をペロペロとなめた。

エンマはまた腰を下ろして仕事をとりあげた。白木綿の長靴下で、エンマはそれをつくらっているのだった。彼女はうつつむいて仕事をにつづけた。彼女は黙っていた。シャルルも黙っていた。ドアの下から吹き込むすきま風が、石畳の上にかすかにほこりを走らせた。シャルルはほこりのはうのを眺めていた。彼の耳に聞こえるものは、自分の頭のなかでズキンズキン鳴る音と、遠くの庭で卵を産む雌鶏の鳴き声ばかりであった。エンマはときどき両てのひらをあてて頬をひやし、それからまたそのてのひらを大きな薪